

『なまえ』

名前とは、普段意識するものではなく、便利だなあ、両親から授かってとても感謝している。そんなことを日々思いながら使う人は少ないだろう。

年代によって名前は違った意味を感じるものだ。

赤ちゃんの時

それは親が生まれてきた我が子に未来の希望を託しつけるもの

幼少期

友達ができ、人それぞれ自分の名前があることを知る。

初めて字を書くのはきつと自分の名前であろう。

自分の名前が書いてあるのを見つけると嬉しく思うものだ。

少年期

この頃から自分の名前を恨む子も出てくるだろう。

変なあだ名をつけられたり、からかわれたりし、

親になんてこんな名前を付けたの

という子もいるだろう。

青年期

苗字から自分の出身地や家業を知り、それを誇りに思うこともあるだろう。自己紹介ではよく耳にするフレーズだ。

女性なら、結婚を機に今まで親しんできた苗字と別れなくてはなりません。

壮年期

この頃になると不二興産東京支社の企画営業の田辺 郁美さん、ゆうきくんのお母さんの田辺 郁美さん、自治会長の田辺さんなど、もはや自分の名前だけではなく責任や、表向きの名前となってくるのだ。

今回このエッセイを書いていて私は忘れていたものに気づいた気がしました。

愛を持って生まれてきたこと、自分の名前を書くのが楽しかったこと、田んぼの辺りと書いて田辺なのか、実家で畑をやっていたこと。

畑でとれたスイカや庭に生っているザクロを食べたり、梅を毎年もぎ取って家族総出で梅酒にしていたこと、飼っていた鶏が生む卵を毎朝食べていたこと。

今では忙しい毎日で、あまり新鮮なものは食べていませんでした。

今回名前について考えたことで自分の癒し方を知ることができました。

